

令和七年度県央史談会第二回史蹟めぐり

「小田原城二の丸・三之丸周辺を歩く」

今回は小田原城の二の丸・三の丸周辺を散策します。

【期 日】 令和7年5月11日(日)

【集合時間】 午前8時30分

【集合場所】 本厚木駅えきちょこ前

【行 程】 本厚木駅(8時48分快速急行小田原行)

-小田原駅(9時28分着)・・・大手門跡(三の丸)・・・馬出門・・・馬屋曲輪・・・銅門・・・郷土文化館・・・藤棚・・・二の丸・・・小田原駅(12時18分発)-本厚木駅(13時05分到着解散)

・・・徒歩 -電車



小田原城二の丸跡地

小田原城二の丸・三の丸概要図



凡例

- 現存している堀
- 埋め立てられた堀
- 土塁 現存していない。
- 空堀 現存していない

注 この概略図は令和7年5月11日、県央史談会第二回史跡めぐり二の丸・三の丸散策ルート案内用に作成したもので、堀など一部省略していますので御理解をお願いします。作成者

小田原城二の丸・三の丸周辺城跡案内 ※小田原城周辺の案内看板をもとに作成。

A 鐘楼

此の鐘は現在、朝夕6時につかれ、時をしらせている。

時を知らせる「時の鐘」は、長い間、昼夜の隔てなくつかれていた。江戸時代の貞享3年(1686)の「貞享3年御引渡記録」の中に「小田原町の時の鐘は昼夜ついている。鐘つきの給金は一年金六両で、この内金三両は町方から、三両は町奉行から遣わしている」という記事があり、300年以上前からつかれていることになる。

この鐘は、初め浜手御門(ここより約150m南)のところにあったのを、明治29年(1896)裁判所の東北隅に移され、さらに大正年間に現在の場所に移された。昭和17年(1942)には、太平洋戦争の激化により、軍需資材が欠乏したため、政府は金属類の供出命令を出し、鐘は応召される「時鐘応召」と呼ばれた。その後、時報は鐘に代わってサイレンやチャイムになったが、城下町に似つかしくないということで、昭和28年(1953)小田原寺院団によって新しい鐘が作られ、これが現在の鐘である。

B 大手門跡

この鐘楼は、江戸時代に小田原城大手門の櫓台北側石垣があった場所にあります。

東側の城下(国道1号線)より一段高くなっており、この門より西側は小田原城三の丸で、藩の重臣屋敷が建ち並んでいました。大手門には、翌年に三代將軍徳川家光の上洛を控えた寛永10年(1632)の改修工事により石垣が造られました。また、寛永20年(1642)に幕府の許可を経て、正保年間(1644～1648)に渡櫓門(わたりやぐらもん)が建設され、延宝年間(1673～1681)には前面に冠木門(かぶきもん)が普請されました。渡櫓門と冠木門からなる大手門の規模は銅門(あかがねもん)とほぼ同じです。「寛永年間小田原城廓(くるわ)総図(通称宮内庁図)」によると、渡櫓門の前には枡形勢溜(ますがたせたまり)が設けられ、さらに冠木門の外には長方形の馬出を設けて防御力を強化しています。城外は幅9間半～11間(約17m～20m)の三の丸堀で隔てられており、堀には「大手口橋台」ともよばれた土橋がもうけられていました。なお、大手門櫓台石垣上に鐘楼が設けられたのは大正年間のことです。

※関連事項:寛文10年(1633)1月21日発生した寛永小田原地震で櫓や門塀が倒壊する大きな被害を受ける、当時の藩主二代藩主稲葉正則(正勝の次男)が幕府の許可を得て復興事業実施、城廓や城下の整備を行った。……江戸期度重なる大地震の度に城廓と城下の復興が行われ、それに必要とする経費が藩財政を圧迫。

C 二の丸東堀

小田原城は、春日局(江戸幕府の三代將軍徳川家光の乳母)の子稲葉正勝が寛永9年(1632)城主になると、大規模な工事が行われ、石垣を備える近世城廓として整備されました。二の丸堀も、この時代に形作られたとみられます。

二の丸の堀は、二の丸馬屋曲輪の二重櫓を南東角として、東西に伸びている二の丸の南側の堀と、南北に伸びている二の丸の東側の堀で構成され、藩主の居館や行政機関がおかれた二の丸と、武家屋敷などが広がる三の丸とを画しています。

二の丸の東側の堀は、本丸や二の丸を守る堀の中で最も大きなもので、二の丸東堀を中心に馬屋曲輪東堀や弁財天東堀から成り、堀幅は最大で約40mの規模がありました。

堀は後世に埋め立てられた。(当時より縮小されている。)

二の丸側に見える石垣は、大正12年(1923)関東大震災で崩れたものを昭和初期に復旧し

たものですが、江戸時代の石垣は今のものより高く、二の丸の石垣として威厳のある姿を見せていました。なお、震災直後、一時この堀を埋め立てる計画がありましたが、小田原保勝会が中心となって保存運動を起こし、その結果、今日までの姿を残すことができました。

D 小田原城本丸・二の丸地区『小田原御用邸跡』

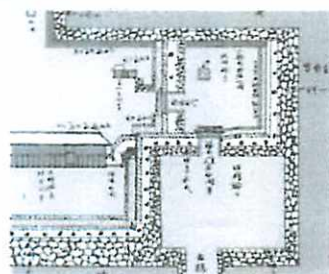
小田原城本丸・二の丸地区は、明治維新・版籍奉還の後、旧陸軍省の所管となり、明治33年(1900)1月御用邸を建設するための地鎮祭をとり行い、翌年、明治34年(1901)1月竣工した。しかし、大正12年(1923)9月1日の関東大震災により全壊、昭和5年(1930)に廃止されました。

御用邸には、小田原は気候温暖で風光明媚なことから多くの皇族が訪れ、小田原の行事に数多く参加され、町民との交流も活発に行われました。

御用邸廃止後、神奈川県立高等女学校(昭和37年移転・平成16年県立小田原高校と統合)現や尋常小学校(戦後小田原市立城内小学校、平成4年市立本町小学校と統合。現三の丸小学校となり、その後、藩校集成館があった地に移転。

E 馬出門

馬出門は、三の丸から二の丸に向かう大手筋上に設けられた重要な門で、枳形の内側に位置する内冠木門(うちかぶきもん)と同様、控え柱にそれぞれ屋根がつく「高麗門形式」の門であったと考えられます。明治34年(1901)発掘調査開始。調査結果をもとに平成21年(2009)に高さ約6.3m、幅約4.7mの規模を持つ馬出門が復元されました。



F 馬出門枳形

馬出門枳形は、馬出門と内冠木門(うちかぶきもん)の二つの門と周囲を土堀で囲まれた方形の空間をいいます。

枳形は、江戸時代初期(1645年頃)の様子を描いた正保図に馬出門土橋を渡って直ぐに馬出門が設けられていましたが、寛文12年(1672)の改修で門は、土橋を渡った奥に移動し、土橋との間に広場が設けられた。

関東大震災で石垣の大部分が崩落し、周辺の堀の一部が埋め立てられましたが、平成15年(2003)から整備のための調査を開始し、平成21年(2009)に復元整備を完了しました。

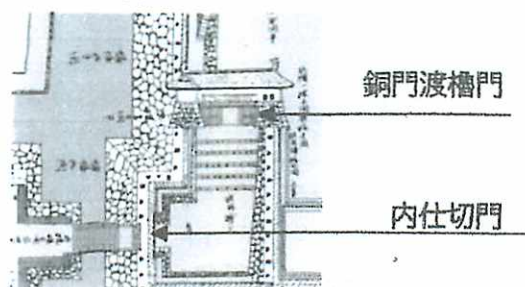
G 銅門(あかがねもん)

小田原城二の丸の表門で南側の馬屋曲輪やお茶壺曲輪とは住吉堀によって隔てられています。江戸時代には、馬出門土橋(どばし)から城内へ入り銅門を通して二の丸御殿や本丸・天守へと進むようになっていた。

明治5年解体、平成9年本来の形式で復元されています。

銅門の形式は、石垣による枳形、内仕切門(埋門形式)、櫓門を組み合わせた枳形門と呼ばれる形式で、渡櫓の門扉や鏡柱に耐火を兼ねた銅の装飾がなされていたことから、この名で呼ばれています。渡櫓門は、幅約6m、長さ約23m、高さ約12mの規模で、渡櫓には「石落とし」と呼

ばれる敵を撃退する仕掛けが設けられていました。



H 大腰掛跡

大腰掛とは、登城する人(銅門から二の丸御殿に入る前)の待機所や番所として用いられた建物で、ここの大腰掛は、徳川將軍家が来た時に使われる特別なものでした。

絵図(「文久図」)の記載や発掘調査の結果から、長さ12間(約 23.63m、奥行約3間半(8.69m)の建物であったことがわかりました。

元禄16年(1703)の元禄地震によって倒壊、焼失し以後再建されませんでした。

I 馬屋曲輪(うまやくるわ)二重櫓(やぐら)

馬屋曲輪は寛永10年(1633)に馬をつなぐ「馬屋」が設置され、寛文20年(1643)には、南東隅に2階建ての二重櫓が建てられました。

この櫓は、元禄16年(1703)の元禄地震で倒壊・焼失し、その後再建されましたが明治時代に取り壊され、櫓台石垣も埋め立てられました。

平成21・22に行われた発掘調査により埋め立てられていた櫓台石垣が出現しました。

櫓台石垣の寸法は、南北 12.4m、東西 10.9mの長方形で、現存する石垣の高さは、約 2.5mでした。

また、櫓台には西側と北側にそれぞれ石段が付けられていました。

発掘調査では、元禄地震で焼けた瓦が大量に発見され記録にあった地震時の火災を裏付けることができました。

また、ここには、樹齢 100 年を超える黒松が生えており、これらの根が石垣や石垣の隙間に入り込んでいる状況も見受けられました。

櫓台石垣と石段は、一度解体して、新たに石を補填して積み直され、馬屋曲輪の土塁内法石垣(どるいうちのりいしがき)とともに復元されました。

J 住吉堀

住吉堀は、銅門と馬屋曲輪・御茶壺曲輪の間を仕切る堀で、寛永9年(1632)以降、稲葉氏による近代工事で完成しました。大正12年(1923)関東大震災で石垣が崩落し、その後埋め立てられ、小田原高等女学校(後の城内高校)が設置されていました。

K 二の丸跡

江戸時代、多くのお城では藩主の住まいは本丸にありました。

しかし、小田原城の本丸には徳川將軍家の御殿があったため、小田原藩主の住まいは二の丸にありました。二の丸の建物は「二の丸御館形」と呼ばれ、藩主の住まいのほか、藩の政治を司る政庁としての役割がありました。

二の丸御館形は、寛永10年(1632)の寛永小田原大地震で被災した後に大規模に整備され、唐門や能舞台を備えた御殿造りの壮麗な建物となりました。しかし、元禄16年(1703)の地震

により倒壊・炎上したことが、発掘調査でも確認されています。

その後、規模を縮小して再建されていますが、幕末に至って幕府老中や將軍家の上洛が再開されると拡張され、本丸御殿に代わる將軍家宿所として用いられました。

明治に入り廃城となった後、明治 34 年(1901)に御用邸が建て替えられましたが、大正 12 年(1923)の関東大震災でほぼ全壊しました。そして、その後、昭和4年(1929)に小田原第二尋常高等小学校(後の城内小学校)が建設されました。

平成4年(1992)に小学校統合に伴い城外へ移転しましたが、残った旧講堂は歴史見聞館として使われています。

L 足柄県庁設置の歴史を記す「明治天皇駐蹕(ちゅうしつ)趾碑」

表

明治六年天皇箱根宮之下温泉より還幸の御途次八月二十八日足柄県庁に臨御遊ばさる實にわが校舎の地なり今や、聖蹟を知る者漸く稀なり仍て其の盛事を謹みて記す

昭和九年五月二十八日

還幸(かんこう)……天皇が出先から帰ること 聖蹟(せいせき)……天皇が行幸した地の旧跡
漸く……長く 仍て……よって 盛事(せいじ)……盛んな事業や行事

裏面に次の内容が刻まれています。(概略)

当事の碑の建立を小田原第二尋常高等小学校職員が企画し、小田原町内の関係者や職員が協力し完成することが出来た。題字は旧小田原藩大久保氏宗家第 20 代大久保忠言(ただとき)が書き、文は史家片岡永左衛門翁が作成した。

昭和九年五月二十八日小田原第二尋常高等小学校長従七位勲八等佐藤喜作

※片岡永左衛門 明治期に小田原町議員、助役など公職を歴任。

郷土史家として、小田原城、小田原の旧跡保存に活躍した。

二の丸東側学橋(まなびはし)付近、旧城内小学校跡地に「明治天皇行在所」の石標とその側にこの碑が建っています。

この碑は廃藩置県断行後、明治 4 年(1871)11月14に設置された足柄県の県庁が旧二の丸の地にあったことを伝える唯一の碑であります。

M 三の丸土塁・幸田門

三の丸土塁は江戸時代の三の丸土塁です。当時は本丸、二の丸(現在の城址公園周辺の範囲)を包むようにお堀と土塁を巡らし、三の丸としていました。この土塁は当時の姿を残す数少ない場所です。この西側に「幸田門」という三の丸入口がありました。

本資料の作成に当たっては次の図書を参考に作成いたしました。

・シリーズ藩物語小田原城 2018 年 10 月 10 日発行 株式会社現代書館

・片岡日記昭和編 2022 年 10 月7日発行 小田原史談会

小田原城の歴史

No.1

年代	歴 史
文明10年頃 (1478年頃)	扇谷上杉家家臣大森氏頼八幡山(現小田原城の西側丘陵)に小田原館を築城を拠点とする。
明応4年頃 (1495年頃)	後北条氏初代早雲、大森藤頼から小田原城奪取
16世紀前期 1500年代前期	後北条氏2代北条氏綱 八幡山(小田原市城山)から現在の城跡に移される。城下形成。
天正18年 (1590年) 第一期大久保氏支配～	小田原攻め、小田原城籠城。大外郭(総延長約9km)を構築し兵士・城下・周辺領民ら計六万人立て籠る。 7月5日降伏 五代氏政・弟氏照切腹 6代氏直高野山へ追放。落城後 秀吉の命により家康の関東移封及び家康の家臣大久保忠世に小田原城(4万5千石)を与えられる。
文禄3年 (1594年)	大久保忠隣(ただちか)父忠世の死去に伴い家督を継ぎ遺領を相続。相模國小田原6万5千石の領主(のちに初代藩主)となる。
慶長8年 (1603年)	徳川家康江戸幕府を開く。忠隣支配下で小田原城修築。城郭を空堀・土塁から石垣造の近代的な城に変貌する。(三の丸東掘遺構玉石積み)
慶長19年 (1614年)	1月19日、家康・秀忠大久保忠世の子初代小田原藩主忠隣(ただちか)改易。小田原藩領を没収し、大外郭・小田原城本丸を除き除却。忠隣近江国へ配流。 第1次番城期幕府直轄支配地となる。～元和5年(1619年)
元和5年 (1619年)	閏12月阿部正次小田城移封支配。～元和9年(1623年)4月 武蔵岩槻に移封
元和9年 (1623年)	第2次番城期幕府直轄支配地となる。～寛永9年(1632年)
寛永9年 (1632年) 稲葉3代支配	11月稲葉正成と妻福(のちの三代將軍徳川家光乳母春日局)の子稲葉正勝、小田原藩(8万5千石)拝領小田原城主となる。 関東第一の要害地箱根防衛任される。 正勝、小田原城の縄張り直し城郭整備実施。
寛永10年 (1633年)	寛永大地震1月21日午前5時頃マグニチュード7.1と伝える小田原城・城下被害甚大潰滅。

小田原城の歴史 No.2	
年代	歴 史
寛永10年 (1933年)	損壊した本丸再建、将軍家光の京都上洛予定で将軍御座所となるため幕府の肝煎で迅速再建。天守 本丸御殿 本丸周りの石垣等 幕府御作事奉行に任命された酒井忠知ら指揮官のもと4万5千両の公費をもって突貫工事で実施された。藩庁・二の丸屋形・御花畑の茶屋(浜御殿) 稲葉家が1万7千両の経費投入し復興事業実施、城下整備 町割り完成近世城下町確立した。
貞享2年 (1685年)	12月3代稲葉正通 越後高田へ移封
貞享3年 (1686年)	正月大久保忠朝(10万3千石)小田原拝領。大久保氏73年ぶりの故地小田原領有～忠良明治4年(1871年)7月まで支配
元禄16年 (1703年)	11月23日元禄大地震発生マグネチュード8.2 巨大津波襲う。天守・本丸御殿・二の丸屋形倒壊焼失。家老杉浦平太夫ほか三の丸付近の武家屋敷18軒ことごとく倒壊。城の復旧、幕府からの援助一切なし 自費で着手。本丸・二の丸・天守台の石垣再構築。天守などに再建時間がかかる。
宝永4年 (1707年)	11月23日富士山宝永噴火。 幕府被災地領分の上知命令。被災地復興、関東郡代伊奈忠順(ただのぶ)に任せる。
天明2年 (1782年)	7月15日、天明の大地震発生。震源小田原西北、天守 三尺(約90cm)傾く。石垣崩壊など被害あり。
文政5年 (1822年)	正月城下三の丸(現在の三の丸小学校敷地)藩校「集成館」開校。廃藩置県後、足柄県権令柏木忠俊「日新館」改称し存続。
嘉永六年 (1853年)	2月2日直下型地震マグニチュード6.7程度。天守の壁・瓦落下。集成館倒壊。
	6月3日米艦隊ペリー来航。幕府から台場築造、大磯・真鶴小田原浦台場へ海防のため藩士派遣。相次ぐ自然災害と海防に藩財政圧迫。

小田原城の歴史		No.3
年代	歴 史	
安政6年 (1859年)	11月30日、8代藩主大久保忠愨(ただなお)没 世継ぎなく取り潰しの危機。元高松松平頼恕(よりひろ)七男準之助(忠礼ただのり)急養子に迎え危機を乗り越える。	
慶応3年 (1867年)	11月九日徳川慶喜大政奉還。朝廷へ政権返上。12月9日王政復古の大号令。薩摩藩を中心とした倒幕強行派、尊王攘夷派志士約500人関東で動揺作戦展開、荻野山中藩陣屋焼き討ち事件起こる。	
慶応4年 (1868年)	鳥羽伏見戦い。薩長を中心とした官軍に幕府軍敗北。戦後小田原藩に旧幕府から箱根関所の警備増強命じられる	
	鳥羽伏見戦いに敗北した旧幕府陸軍の撤兵隊(さつぺいたい)、遊撃隊が江戸を脱出し、勢力回復を図り小田原藩へ協力拳兵を要請したが、小田原藩はこれを拒否。	
	箱根戦争 箱根関所で小田原藩兵と遊撃隊が戦闘、遊撃隊は退陣。 そのころ「小田原へ慶喜と脱走兵が軍艦で下田に着き小田原へ向かっている」と噂があり(誤報)、この噂を信じ 藩主忠礼と藩首脳陣 藩論佐幕へ反転、遊撃隊を小田原城へ向かい入れることにした。 これにより関所で小田原藩は遊撃隊と和睦、官軍の中井範五郎軍監を殺害し、遊撃隊の先鋒隊関所通過した6月21日21日小田原城下に到着。	
	佐幕から勤王へ 小田原藩の佐幕へ寝返りに対して江戸留守居中垣斎宮(謙斎)すぐ藩論を勤王に戻すべく小田原に向かい説得。再び勤王へ拳兵中止、遊撃隊箱根へ引き上げた。藩主忠礼は謹慎した。	
勤王から佐幕へ方針転換		官軍は小田原へ問罪使(もんざいし)、穂波経度(つねのり)を派遣。小田原藩家老渡辺了叟(りょうそう)は「遊撃隊に騙された」と釈明し、「小田原藩の手で遊撃隊を仕留めてみる」と嘆願。 釈明・嘆願の結果、忠礼の官位剥奪、領知没収、小田原藩による遊撃隊掃蕩を許可した。」小田原藩兵入生田で戦闘開始先鋒隊は敗走した。後、官軍は小田原城を接收入場した。
再び佐幕から勤王へ		

小田原城の歴史

No.4

年代	歴 史
箱根戦争 戦後処理	一時佐幕へ寝返りに対する処分 家老渡辺了叟ほか3名審問のため江戸護送 渡辺了叟は藩命で切腹、ほか三人国元謹慎。 9月27日忠礼の処分永蟄居下される。
明治元年 (1868年)	大久保家一族から後嗣をむかえ、小田原藩7万5千石所領許可(3万8千石減封) 10月2日分家荻野山中藩主大久保教義の長男岩丸との養子縁組が及び本家家督相続許可される。岩丸は忠良(ちゅうりょう)と改名し新藩主となる。
明治2年 (1869年) 版籍奉還	版籍奉還。6月19日小田原藩版籍奉還の願書を明治政府へ提出受理される。藩主忠良→小田原藩知事に任命 6月 新組織へ変更。村方担当地方役所を郡政局に、10月寺社、郡政・市政(町方)各局をまとめて民政局に、役所の名称を民政役所、担当は民政掛とした。 10月前藩主忠礼永蟄居解除
明治2年 (1870年)	幕末、京都出兵、忠礼の小田原への初入部、忠礼甲府城代赴任、箱根戦争の借金膨らむ、返済不能。そのうえ減封で実質収入高二万石そこそこ財政破綻状態。忠良二の丸屋形を出て三の丸旧家老杉浦邸に移る。小田原城売却。
城を売却	11月10日、天守と五つの櫓、城下高梨町の平井清八郎に900両で払い下げ。鯨を横浜のドイツ人に700両で売る、天守など解体。
廃藩置県 明治4年 (1871年)	7月14日廃藩置県により全国の藩廃止。 藩知事忠良罷免され東京移住。 小田原県を経て11月14日足柄県が設置され、県のトップ参事に韭山県の柏木忠俊が任命され県庁二の丸に置かれる。県庁官員大半が小田原藩士。 明治6年廃条令小田原城残る 同年末本丸・二の丸陸軍省に移管される。

小田原城の歴史(天守閣復興)		No.5
年代	歴 史	
明治3年 (1870年)	小田原城天守閣取り壊し以後再建されず。	
小田原城天守閣の復興に向けての取り組み一「天守閣石一積運動」		
昭和25年 (1950年)	小田原城天守閣復興に向けて、市内の町内会が、「天守閣石一積運動」を始めました。この活動による24万円の募金も活用し昭和28年(1953年12月)に天守台石垣が復興しました。	
小田原城天守閣の復興に向けての取り組み二「復興資金」の募金開始		
昭和31年 (1956年)	10月商工会議所が「小田原城天守閣復興促進会」を結成、翌年5月から募金開始、市も本格的に取り組み、10月国県から天守閣復興資金に係る財政支援が受けられることが決定。募金総額は1959年までの2年間で募金を集め総額2千万円以上になった。	
小田原城天守閣の復興に向けての取り組み二「天守閣復興瓦一枚運動」		
昭和34年 (1959年)	12月から、小田原市商工観光課、城址公園本丸広場ほか駅前、市施設、商店街など数か所に受付を設置し、100円か300円の瓦を購入し、それを天守閣に設置するという運動では240万円が集まった。天守閣に使用された瓦は6万3440枚。約3分の1にあたる2万1366枚に、復興を望んだ市民らの名前と想いが今も刻まれている。	
天守閣再建工事昭和34年(1959)2月開始 総工費8200万円		
昭和35(1960)5月25日完成 石垣を含め高さ39m 白亜3層4階 鉄筋コンクリート造		